

第3回 食の循環によるまちづくり推進委員会 議事録

日時：平成23年2月23日（水） 午後6時から午後8時

会場：新発田市生涯学習センター 創作実習室

参集者：下條荘市委員長、清野千香子副委員長、

〔委員〕齊藤幸子委員、渡辺栄子委員、木戸寿明委員、佐藤ミネ委員、高山廣伸委員、
中野藤彰委員、出村満委員、伊藤ひろみ委員、佐藤恭子委員、渡辺兼一委員、加藤康弘委員、
津村賢委員、星野龍一委員、鈴木裕子委員、菅一義委員、市野瀬節子委員、宮崎光夫委員、
茂野栄委員、大竹政弘委員（21名）

〔アドバイザー〕新潟医療福祉大学 健康科学部 村山伸子教授

〔事務局〕高澤総合政策部長、食の循環によるまちづくり推進室（櫻井参事、下妻副参事、吉田主任）
環境衛生課（長谷川副参事、斎藤主任）

1 開会

【事務局】

第3回新発田市食の循環によるまちづくり推進委員会を開催します。

規約に基づき、下條委員長から議事の進行をよろしくお願いします。

【委員長】

皆様、お晩でございます。去年の暑い時期からしばらく委員会が無かったわけですが、その間に市長選挙等があり時間が経過したということでもあります。夏の委員会以降、永島敏行さんに来ていただいたの大使任命式を行うなど様々なことがありました。それらの報告を兼ねて本日の会議を行いたいということでよろしくお願ひし、挨拶に代えさせていただきます。

2 議事

【委員長】

平成22年度の事業の進捗状況について事務局から説明願ひます。

【事務局】

（資料に基づき説明）

【委員長】

大使と応援団の任期は2年で、23年度末までということによろしかったですでしょうか。

【事務局】

大使については単年度毎に就任いただき、来年度も引き続きお願ひしていきたいと考えています。また、応援団の皆さんについては、任期は23年度末までとなっております。

【委員長】

ご質問等はありませんでしょうか。

【副委員長】

私も事業に関わらせていただき一生懸命やっていることは分かるのですが、周囲で、リレートークや永島大使のことをどれくらい知っているのか、こんな風に言っていたということがあったらお聞かせ願ひえればと思います。知らない人からすれば、「有名な人が来たみたいだね」で周りの人たちは終わることもあると思いますので。

【委員長】

今ほど副委員長から提案がありましたが、大体の市民の方は広報などを通じて永島さんに大使をお願ひ

したということをご存知いただいていると思います。では、実際にどうしているのかについては、かなりの方がご存知ないであろうと私も思います。米倉の青空収穫祭に来てもらい、市民の皆さんと交流していただいたが、引き続き新発田のPRをお願いしたいと思っています。

【A 委員】

大使の取組に係る情報提供については、インターネットを行っている人はご存知かも知れないが、交流会に行っていない人は情報提供が無いわけで、市民の年齢も考慮した紙による情報提供もお願いしたい。

【委員長】

広報しばた 10 月 1 日号にも交流している様子が大きく掲載されていました。食の循環のまちづくりのホームページには大使や応援団等の情報が随時掲載されています。どれだけの人が見ているかということになるが、事務局で何か考えはありますか。

【事務局】

永島さんには昨年 9 月に大使に就任いただき、新発田の取組を全国的に応援いただいているところです。半年が経過し、少しずつ広報やホームページで紹介し、米倉地区における交流会なども進めてきていますが、ご意見いただいたとおり、様々な場を通じて永島さんが食の循環大使として、市民の皆さんがもっと親しみが持てるような企画を来年度は考えていく必要があると感じています。その他にも活発な意見をいただければと思っております。

【委員長】

永島さんには、また新発田に来ていただくことも含め市民と交流をしていただき、様々な場面で新発田のことを宣伝していただきたいと思います。

次に食の循環しばたモットイナイ運動の進捗状況と今後の取組についてであります。前回の委員会でモットイナイ運動を充実させていくためには、まず子どもたちを通して働き掛けていくことが重要であるとの意見がかなり出たように思っています。

また各学校等でも取組が始まっているとのことですが、我々ですらモットイナイ運動を理解していないことが多々あると思ひ、今回DVDを用意したので、皆さんでご覧いただきたいと思ひます。

(DVD「食とみどりの新発田っ子プラン」の視聴)

【委員長】

このDVDについては、ほとんどの方が始めてご覧になったのではないのでしょうか。

「食とみどりの新発田っ子プラン」と「モットイナイ運動」はリンクしているわけで、学校であれば食とみどりの新発田っ子プランであり、モットイナイ運動は家庭や地域での取組になっていくわけです。

では、このプランに基づく具体的な取組について、宮崎委員がおられますので、説明をお願いします。

【宮崎委員】

食とみどりの新発田っ子プランでは、市内小中学校 34 校で「育てる、作る、食べる、返す」の「食のサイクル」に基づいた食育を行っており、「返す」という取組が新発田市の特徴になっています。

学校給食のサイクル推進事業において、学校給食でやむを得ず出た残渣を「もったいない」ということでユ-＆ミーの会にご協力をいただき、有機資源センターに運び堆肥にしています。このような取組を現在、15 校で進めており、毎年、設備などを整えながら少しずつ増やしていこうと考えています。

次に、給食モットイナイ週間の実施について、学校給食を通じたモットイナイ運動を北共同調理場で取り組みましたので紹介します。

毎年 1 月の給食週間になると、各調理場が工夫を凝らした取組を行っており、特に、今年、北共同調理場ではモットイナイ運動に合わせ、「給食モットイナイ週間」と題して取組を行いました。

ねらいは、「『いただきます』『ごちそうさま』の意味を知り、食べ物を大切にする気持ちを育てる」というもので、1月下旬には交流給食会を行いました。事前に養豚農とオータムポエムの農家取材し、中学生が生産者インタビューするビデオを作成しました。ビデオを見ながら、「いただきます」「ごちそうさま」の意味や食料自給率、世界の飢餓の話し合いを行い、当たり前前に食べているものがそうではないことを確認しながら、感想文を書いてもらいました。特に養豚農家の話は、子どもたちの胸に響いたようで、その様子を資料からご覧いただければと思います。取組効果もあり、期間中、14クラスが完食するなど、日頃無い数値となったこと、また、取組を楽しむ工夫として、学校栄養職員が作った完食シールを活用するなどしました。

【委員長】

ありがとうございました。

「食とみどりの新発田っ子プラン」と「モッタイナイ運動」がリンクし、各校の取組を通じて、子どもの頃からもったいないということ、「いただきます」「ごちそうさま」とはどういう意味なのかを感じてくれる。この子どもたちが大人になる中で、心に残ってくれば本当のモッタイナイ運動が生きてくると思います。村山教授もお越しですので、新発田の取組についてご助言をお願いいたします。

【村山教授】

「食とみどりの新発田っ子プラン」は、市内全ての小中学校、幼稚園、保育園で行われていて、他市町村にはない取組となっている。そして、このプランには具体的な目標があり、年長児では「一人でごはんが炊ける子ども」、小学校6年生では「一人でご飯を作れる子ども」、中学3年生では「一人でご飯のある夕食1食分を作れる子ども」ということで、目指す子ども像が全て「作る」ということで、「料理を作ること」に焦点をあてています。こうした具体的目標を掲げていることもかなり少ないと思います。

今回、モッタイナイ運動を学校、幼稚園、保育園の中で取り組むにあたり、「モッタイナイ」ということを学ぶには、「料理を作る」ということと非常に関連があると考えています。食材を揃えて、調理し、食べるという一連のプロセスを体験することで、初めて食物がどこから来て、どうやって自分のものになっていくのかを知ることを通じ、「モッタイナイ」の気持ちが育っていくことにつながっていくため、この具体的目標とモッタイナイ運動は関連が強いものです。この目標があるからこそ、モッタイナイ運動を行っていけると思います。

私どもの大学では、「食とみどりの新発田っ子プラン」の取組評価を担当させていただいていて、平成20年から平成22年に全小中学校の6年生及び中学3年生とその保護者を対象に調査し、最終的な目指す姿に向かいどのような効果があったかを評価しています。昨年と一昨年の結果からモッタイナイに関連する調査として、「いただきますを言う子どもがどれだけいるか」では小学生で8~9割いますが、残念ながら中学生になると下がり、問題として保護者の方がもっと低く、特にお父さんが低いといった結果になっています。今後の活動として、子どもと同時に保護者に対して、どう取り組むかも課題になると考えています。

【委員長】

「食とみどりの新発田っ子プラン」とモッタイナイ運動について、意見等はございませんか。

学校でもゆとりの時間が減っていく中で、「食とみどりの新発田っ子プラン」取組の時間が減るのではないかとすることも懸念されます。

【宮崎委員】

確かに、取組時間は減っていて、新発田市では日本語教育を行っているためそうした現状になっています。しかし、日本語は教科、食育は教材です。総合学習や家庭科の時間だけでなく様々な教科でやっているというのが新発田市の食育の特徴でもあり、その中で十分取り組んでいけると考えています。

【委員長】

次に、これまでの子ども、家庭、学校での取組から視点を変え、大人の関わる部分のモッタイナイ運動についてです。モッタイナイ運動が、なかなか浸透していないのが現状です。特に市内飲食店での取組を、市民の皆さんが理解しているかといえばそうではない気がしています。モッタイナイ運動協力店の状況等について、事務局より報告をお願いします。

【事務局】

(資料に基づき説明)

【委員長】

事務局から報告ありましたが、私たちもチラシを見ているし、協力店についても見ているが、実際店に行った際には忘れてしまっているのが現状です。そこで飲食店に関係します委員の方から、取組の現状をお話しをお願いします。

【B委員】

私どもでは、お客様、幹事さんに対し、女将から取組について呼び掛けています。また、持ち帰りの出来るものは空折を用意し対応しています。市民が取組を知っているかといえば、おそらく大半の方が知らない、取組が浸透していないのが現状だと思います。また、店側に一目でわかるマスコットの的なものがあるとありがたいです。

【委員長】

他の飲食店に関わる委員の取組状況についても、事務局より報告をお願いします。

【事務局】

(資料に基づき説明)

【委員長】

次に、モッタイナイ運動の定着とこの運動をどのようにしたら分かっていただけるのかについて、3つのグループで話し合いをお願いします。

(以降、班に分かれてのグループワークを実施)

【委員長】

各班とも良い意見が出されたのではないかと思います。1班から順に発表をお願いします。

【1班】

モッタイナイ運動協力店側の周知PRについて話し合いました。

業種も様々なことから、のぼり旗等で統一の資材でPRするのは難しいのではないかという話になりました。客層や業種によっても対応が変わるし、店の雰囲気を変えない形でコースターやはし袋に表示することや、食堂での卓上広告なども有効ではないかとの意見もありました。また、目立つグッズよりも言葉やロゴを使い、運動に関するメッセージやなどを表示し、統一感を出せないかとの意見もありました。

店側の活動もあるが、モッタイナイ運動の基本は子どもたちと家庭であることから子どもたちを巻き込んだ家庭からの取組を基本として、協力店、飲食店の運動を進めていくことが必要との意見でした。

【2班】

動くものが良いのではとの意見がありました。他に、食堂での卓上広告や、割烹でははし袋にシール等を使い、字だけではなく絵も使ってアピールすることが良いのではないか。また、料理を持って帰れるものが分かる皿の工夫、お客様が声を掛けやすい店側の仕掛け、メニュー上でのPR、店の内外に運動の案内があればいいという意見もありました。中でも、一番活発に意見が出されたのは、提灯が良いという意

見です。新発田らしさをアピールするために金魚台輪をキャラクターにした提灯やポスターにしてはどうかという意見が出ました。

【3班】

このモットイナイ運動も食の循環によるまちづくりの中の取組であることを、再認識して取り組むべきです。のぼり旗やポスターに大使の永島さんの顔があれば、「食の循環」の取組とつながる運動であると感じてもらえるため、それを利用すべきとの意見が出されました。一方で、大使の任期があることから、その都度作り変えていくことで取組も大使も注目されて良いとの話もありました。

また、運動につながるキャラクターを考え、シールを作成し、お店のはし袋やお店のものにシールを使ってPR出来るし、持ち帰りの折箱にシールを貼ることで、持ち帰った家庭でもモットイナイ運動やお店の取組を知ってもらうことができるのではとの意見もありました。

お店の雰囲気壊さず、新発田らしいものでPRすることが大事で、金魚台輪等を使って協力店を示すものとしたらよいのではないかと。そして、それが新発田のお土産等になって、様々なところに波及すれば良いという意見も出されました。金魚台輪の提灯を作り、店先やレジ、フロント等で表示すると協力店だと分かる。また、店側もお客様に無理強いはできないので、席についた際に、取組が分かるような名刺大の説明書き等があるといいのではとの話も出ました。こうした取組を楽しみながらできて、協力店、お客様にも互いにメリットがあることが長続きする取組となり、協力店も増えていくことになると思うとの話でした。

【委員長】

各班から発表いただきましたが、業種やお客様の問題、店のイメージを壊してはいけない、新発田らしさがあっても良い等のキーワードになるような意見が出されたと思います。

それでは、村山教授からもご助言をお願いいたします。

【村山教授】

大きなコンセプトとして、お店の外で運動のイメージができる表示があり、それがモットイナイ運動でつながり、町全体のイメージできるものが必要だと思います。そして、お店の中で分かるもの。はし袋、シール、卓上広告、ポスターなどによる、中の仕掛けが必要です。面白いと思ったことは、持ち帰り容器にシールを貼り家庭へ持ち帰ることで、お店から家庭へのつながりが出来てくるということ。また、具体的な取組として、新発田らしさとお店のイメージをどんな風に結び付けていくのか。キャラクターや永島さんに活躍いただくこともあります。「食の循環」とのつながりがイメージできるものも必要です。

委員の皆さんは、市の食の循環によるまちづくりのために集まられているわけですが、この活動は子どもたちが育っていく地域社会がどうなっていくのかということにつながる活動であると思いますし、本日の資料の「しばた食の循環応援団」の竹下和男さんのメッセージにもあるように、「新発田市民全員を巻き込む『食の循環によるまちづくり』は、今より素晴らしい地域社会を未来に残そうと手をつなぐすきな大人たちの活動です。子どもたちが“自分もこんな大人になりたい”と思ってくれる背中を、みんなの力で広げよう。」ということ。まさに今日の会議が、この一つの姿であると思わずに少し感激しました。ますます、力や知恵を出し合い、この活動を広げていくような姿になってくれれば良いし、私たち大人が一生懸命やることで子どもたちも影響を受けていくので、自分たちの地域は自分たちで作っていくという姿を見せていただきたいと思います。

【委員長】

ありがとうございました。

テーマに沿った結論は簡単に出るものではなく、今日中に出す予定はありません。村山教授からもお話

がありました。竹下和男さんのコメントを見て私もそのように思いました。

では、高澤総合政策部長もお出でなので、お考え等がありましたらお話をお願いします。

【高澤部長】

食の循環によるまちづくり関わってきた一人として、皆様の協力によりここまで取組の実が付いたことに感謝しています。今後も、市長は食の循環の取組を続けると言っておられるので、皆様から力添えいただき、新発田市の大きな取組として大きな花が咲くようにご協力をお願いします。

【委員長】

ありがとうございました。

各班の意見をもとに、具体的な話にしていく必要があります。そのため、小委員会を立上げて話をまとめ、その結果を皆さんに報告して意見を聞いていくのが良いと考え、事務局と打合せしてきました。その内容について事務局より説明をお願いします。

【事務局】

小委員会の委員には飲食店側、利用する市民の立場等からお願いしたいと考えております。

案として、高橋聖治委員、高山廣伸委員、中野則司委員、渡辺栄子委員、鈴木裕子委員、下條委員長、清野副委員長のほか、事務局が入らせていただき、検討したいと考えております。

【委員長】

事務局からの案にありますように、モットイナイ運動をより強固なものとするため、今日の検討結果をもとに、具体化に向けて話し合う会議と認識していただきたいと思います。案にありました、委員の方々にお世話になることでよろしいでしょうか。

(各委員から拍手あり)

ありがとうございました。

3月に入り小委員会を開催いたしますのでよろしくをお願いします。

以上を持ちまして閉会といたします。本日は、お疲れ様でした。